

仕事

並木 せつ子

いつの頃までだったか、職人さんが大きな看板にペンキで絵や文字を描いているのを見かけることがあった。私はそれを見ているのが好きだった。ほとんど下書きもせず大きな面に描いてゆく仕事は驚きであり憧れでもあった。「ペンキ屋さん」といっていただろうか。飽かず眺めていたのを覚えている。そんな現場にはそうそう立ち会えるものではなかったから出会えれば幸運だった。やがてそんな現場を見かけなくなり、自分の職業を選ぶ頃にはすっかり忘れてしまったが、後に仕事についてからも「仕事って何だろう」と考えてしまうようなとき——たいてい行き詰まっているときだった——には、なぜか必ず思い出す光景の一つだった。

最近、朝日新聞の投書欄に「仕事で楽しめないのはダサイ」という題で高校生が〈大人になると仕事で楽しめなくなる〉と大人は言うが、〈自分にとって好きでもない仕事で、いやいや生活を送るほどつまらない人生はない〉という内容の文章を書いていた。これを読んだ時も、あの看板の仕事の場面が浮かんできた。私にとっては憧れであり尊敬に値する仕事だったけれど、あの職人さんは仕事を楽しめていたのだろうか。

津軽三味線奏者の高橋竹山は、自らの三味線を〈くうためにやった三味線〉〈はじめから銭コあって三味線好きでやった人たちがうんだ〉という。三味線は生きるため〈くうため〉のぎりぎりの選択だったが、何度も逃げ出したくなるような門付生活の中で、やがて〈三味線一丁でだれにも負けぬ芸をやるようになりたい〉と願うようになる。自ら望んでいた仕事ではなくても、技を磨くことによ

て独自の境地にたどりついたのだった。(『津軽三味線ひとり旅』)

反対に夢をもって選んだ仕事でも生計が成り立たず断念したり、途中で向いていないと気づいたり、投書欄にあったような〈楽しめない〉人生になることもある。まったく難儀なことだ。仕事の種類や、働くことに対する考え方が多様になったことも、自分の望む仕事と竹山の言うところの〈くうため〉——生計を立てる——の仕事の間の溝を深くしているのかもしれない

そんな背景もあってか、図書館の児童書のコーナーに「仕事」の本が増えた。かつて中高生向きが主流だったのに、今では小学生向きの本まで山のようだ。どんな仕事があって、どうすればなれるかを数多く紹介した『小学生のためのしごと大事典』(竹書房)『好きから見つけるなりたい職業ガイドブック』(PHP研究所)、実際に仕事についている人が自分の仕事の内容を紹介する『ただいまお仕事中』(福音館書店)『わたしの仕事(全14巻)』(理論社)など、仕事の選択肢が数多提示されている。トリマー、ネイルアーティスト、シューフィッター、ケアマネージャーなど、以前は想像もつかなかった仕事だ。「仕事とは何か」「なぜ働くのか」を考える本もたくさんある。

こういう本の中から自分に向いた仕事を探すのも一つの方法だろう。知らなかった仕事に出会うかもしれない。『ルリクールおじさん』(伊勢英子著)や『ペンキや』(梨木香歩著)を読んで、製本家やペンキ屋をめざす子どもがいたら、それはそれですてきなことだ。周囲の大人に憧れてその仕事にいざなわれるのもいいだろう。ただただ、選んだ仕事で生計がたてられますようにと思う。この世は、本には出ていないような仕事や誰もやりたがらない仕事も含めた、たくさんの仕事とそれに従事するたくさんの人々に担われているのだから。(なみき せつこ)

公立図書館の児童サービスについて～図書館勤務で出会ってきたこと～

「子どもの読書活動の推進に関する法律」が2001年に公布・施行され、全国の自治体では、新しい子ども図書館の設立や既存の児童書室の拡充など、さまざまな取り組みが行われています。しかし、それよりずっと前から、多くの方々が子どもの読書環境の改善や充実のために奮闘されてきました。そうした先人のご活躍に刺激を受け、励まされ、公立図書館での児童サービスの発展に力を注いでこられたおふたりに、図書館員になられてのこれまでと、これからをお話いただきます。

みずもさん：人口3万人の歴史豊かな町の図書館に勤務、定年後は後進の育成に。

ひろはさん：大都市の市立図書館各館に勤務。

こうして司書に

—まずは、図書館員になられたきっかけを。

みずもさん：大学の史学科で教職課程を学んでいたところ、司書課程も取れると聞いて挑戦してみたら、とっても面白くて。こちらに進みたい！と思いました。司書課程の中で図書館実習の時間があり、館長や職員の方に、「とても図書館員に向いている！」と、おだてられてその気になり、司書へと路線変更したのです。その館長に、「地元で就職して、地元の図書館をよくしていきなさい」と再三言われました。折よく私の住む町で職員を募集するという話を聞き、受けたら受かりまして。図書館から異動する方がいたので、そこへ私が滑り込めたのです。

ひろはさん：一般職員としての採用ですよ。

みずもさん：そうです。司書に就けたのは、とても運がよかったですよね。図書館は公民館の3階にある小さな一室で、職員も2人だけで資料費も少なかったです。

勤めて2年目くらいにもう少し大きなところに移転し、職員も3人に増えました。ある日、昼間は姉妹で、夕方には親子でと1日に2回図書館に来ていた女の子に、「もう読む本がなくなっちゃった」と言われ、ショックでした。子どもの本を増やさなくてはと奮起しましたね。

—ひろはさんはどんなきっかけですか？

ひろはさん：私の世代だと、「家庭文庫で育ちました」、「将来は図書館員になって児童サービスをします！」というような生え抜きの図書館

員がいますが、そのようなタイプではなく、何となく司書の仕事に就いたという感じです。

大学で、「公共・大学・専門と様々な図書館があって、仕事もそれぞれに違う」と聞かされていましてから、まず地元の市立図書館でアルバイトをさせてもらったりしました。児童カウンターがいちばん面白いなあと実感したものです。

実習では、県立図書館に行きました。市立と県立を両方見て、採用試験では市立を受けたのです。そこは司書採用があり、司書になるべく願書を書いて応募し、受かったというわけです。

図書館の現場に飛び込んで

—児童サービスに力を入れるようになったのは、どうしてですか？

ひろはさん：最初から児童サービスと思っていたわけではないのです。その市では、児童サービス担当といった括りがなく、全員が全部を担当して、オールマイティの司書を育てるという時期がありました。レファレンスカウンターも、どの分野も全部受けますというやり方でした。

そうした中で、郷土資料の解題を作るプロジェクトや児童サービスの勉強会など、いろいろ挑戦し、やはり児童サービスが楽しいかなと思うようになりました。

みずもさん：最初の図書館には、長くて大きなカウンターがあり、中学1年生だった男の子たちがそれを囲んで、おしゃべりしていました。

勤め出してまもなく、そのグループの一人に「ナルニアは読んでいるでしょ？」と聞かれ、「いいえ」と答えると、「だめだよ、ナルニアは読まなくちゃ」と言われてしまったのです。その

子は小学生の頃から『指輪物語』や『トムは真夜中の庭で』などに親しんでいて、周りの子どもたちも触発されて読んでいたようです。違う中学校の、コロボックル好きの男子もその輪に加わるようになり、そうした男の子たちに本当に鍛えられました。大切なことは子どもたちが教えてくれた、そんな感じでしょうか。その子たちに会っていなかったら、児童サービスに取り組んでいなかったかもしれませんね。その都度その都度出会った人や場所のおかげで、進むべくして進んでこられたように思っています。

—実際に、児童サービスに取り組まれていかがでしたか？

みずもさん：子どもの本を買い始めていたときに、教育委員会の中には、「学校図書館があるのにどうして子どもの本を買うのだ!？」などと言う方がいたのです。

当時、私たちの町を管轄する県立の図書館には児童サービスの第一人者がいらして、同僚と話し合い、その方とところに相談に行きました。町の図書館の現状を書いたものと、学校の先生方にそれぞれの学校図書館の現状——本が全然足りないなど——を書いてもらったものを、お読みいただいたのです。それで、公立図書館の児童サービスのあるべき姿というものを書いていただき、それをガリ版で刷って、町のお偉いさんやいろいろな人に配って現状を訴えてまわりました。ふたりとも若かったから、何とかしなければと発奮してしまったのでしょうか。

ただ当時、患っていたのは、その同僚が「私はいろいろ経験しているから、外へどんどん出て勉強をして」と背中を押してくれ、県内のあらゆる研究会や児童サービスの集まりに参加させてもらえたことです。県内の図書館や児童サービスの講義の受講者などに人脈が広がり、とてもありがたかったですね。

ひろはさん：県立図書館は県内の市町村の図書館をバックアップする役目があるのですよね。そういった集まりが段々減ってきてしまって、司書同士、顔がわからなくなりつつありますね。

みずもさん：私が図書館に入った時、児童サービス担当者のための研修会は、夏休み以外毎月ありました。最初の年は猪熊葉子さんの講義も受けました。30年も通い続けているような方々がいらっしやる中で、隣に座った先輩に、その頃注目されていた灰谷健次郎について「この本は読んだ?」と声をかけていただいて。猪熊先生の講義を聴き、休み時には先輩方のレクチャーを受けて、鍛えられましたね。

—その研修会にはどのくらい集まられていたのですか？

みずもさん：50～60人くらいでしょうか。新しい貸出中心の図書館を作っていこうという気運がとても盛んでした。60年代に始まって、70～80年代のことです。

—熱のある、時代のただ中という感じですね。

ひろはさん：私たちは全く意識しないでただ、波の中にいたのですけれどね。その時代は人であふれていました。

名乗ったが勝ち

ひろはさん：みずもさんの県では児童サービスをきちんとやろうという理念があって、活動されていたのがすごいですよね。私の県ではそういうものがなかったですし、市では、児童サービスは重視されていませんでした。おはなし会などに熱心な方はいましたが、人形を作ったりしていると、他の人からは遊んでいるように思われて。児童書を買うための選定担当も、あくまでも本を買う担当でした。

それで日本図書館協会の児童図書館員養成講座に通い、資料とサービスは結びついているべきだと改めて認識し、次の図書館に異動した際に、「児童サービス担当」を自分で作りました。本を選ぶ人がサービスなども全部やりますと宣言し、毎年資料を作って報告しました。そして、異動するたびにその館に「児童サービス担当」というものを作りました。近年、全館の児童サービスに目配りする担当が中央図書館に出来たのは嬉しいことでした。(次号に続きます)